

キプリアヌス『カトリック教会の一致について』

Cyprianus, *De Ecclesiae Catholicae Unitate*.(1)

吉 田 聖

I 翻訳と注解

1. 主は私たちに警告して、「あなたたちは地の塩である。」(マタ 5, 13)と言われ、また罪の汚れのないまでに純真であれ、そしてさらに、単純で賢明であれと命ぜられました。ゆえに愛する兄弟たちよ、巧妙な敵のわるだくみを見抜き、用心しなければなりません。そのためには、よく気をつけて洞察し警戒するよりほかに、ふさわしいことがあるでしょうか。そうしなければ、父なる神の英知キリストを負う私たちに、救霊の備えについて知恵が欠けているように思われます。恐るべきは迫害だけでなく、すべて公然と戦いをいどんで神のしもべを圧倒し墮落させようとして攻撃してくるものでもないのです。恐怖の対象が眼前にあり明らかな場合、精神が前もって準備できる場合、仇である悪魔¹⁾が明らかに自分を示している場合は用心がしやすいものです。しかし、こっそりと私たちに窺い寄り、平和の見せかけで惑わし、隠れた小道をはい寄って来るので蛇²⁾と名付けられる敵を、とくに恐れ警戒しなければなりません。人を巧みにまるめこむのは彼の持ち前のこうかつさであり、腹黒くて人目をはばかる策略なのです。こうして彼は世の初めのその時から人を欺いてきました。偽りの言葉をもってへつらい、経験のない人を不注意や軽率によって迷わせたのです。こうして彼は主ご自身をも誘おうとつとめ、ひそかにだまそうとして、もう一度主に這い寄ったのです。しかし彼は主に見抜かれ仮面を剥がれ、そして屈服したのです。主に見付けられ、はねつけられてしまったからです。

2. 古い人の道避け世に勝ったキリストの足跡を踏むために、一つの戒めの模範が与えられています。それは私たちが不注意によって、ふたたび永遠の死のわなにかかることなく、危険を予知してすでに受けた永遠の生命を保持するためです。こうして死は駆逐され克服されたのですが、もしキリストのこの戒めを守らなければ、私たちはどうして永遠の生命を得ることが出来るのでしょうか。キリストご自身も私たちに警告して言われました。「もし生命を得たいのなら、おきてを守りなさい。」(マタ 19, 17)。さらにまた「わたしの命じることを実行するならば、お前はわたしの友である。もう、わたしは、お前たちを僕とは呼ばない。」(ヨハ 15, 14)と言われました。主はこのおきてを守る人を、結局、力強い人、ゆるがない岩の上にたてられた人、³⁾ 世のあらゆる雷雨と暴風に対して堅固不動で安全な者と宣言されるのです。主は言われます。「わたしのこれらの言葉を聞いて実行する人は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いて、その家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである。」(マタ 7, 24)。ですから私たちはこのみことばの上に固く立ち、主が教えそして行われたことを、共に学び行わねばなりません。ところで、キリストがしなさいと命じたことを行わない人が、どうしてキリストを信じていると言えるのでしょうか。あるいは信仰のおきてを守らない人が、どうしてキリストを信じていると言えるのでしょうか。こういう人は必ずさまよい歩き誤謬の精神にとらえられ、風に動かされる塵のように吹き散らされるでしょう。そしてこういう人は救いの真理に従わないから、少しも救いに近づかず前進もしないでしょう。

3. しかし、[愛する兄弟たちよ]⁴⁾ 用心しなければならないのは、ただ公然と明示されたものばかりでなく、巧みなごまかしをもって欺くものです。キリストの名のもとに不注意な人々を欺こうとするほど、こうかつで陰險なものはありません。光が全世界にくまなく輝き、耳の不自由な人は

神の声を聞き、目の不自由な人は神を見る目を開き、弱い者は永遠の健康によってふたたび強い者になり、足の不自由な人は教会に走って行き、口の不自由な人ははっきりとことばを使って祈りをささげようになりました。キリストの出現により、見破られ投げ落とされた悪魔は、おのれの偶像が見放され、おのれを祭る神殿や寺院がおびたしい信者から見捨てられたのを知って、新たなごまかしを工夫しました。彼は異端を造り分離をかもしだし、一致を分裂させるために信仰を覆い、真理を偽造するのです。すでに光に近づきこの世のやみからのがれ得たと妄想する者を、彼は気付かれないうちに、新しいやみで包んでしまうのです。そういう人はキリストの福音に従わずおきても守らなくなるのに、自分はキリスト者だと称するようになります。暗やみを歩きながら、光を持っていると考えているのです。つまり、使徒（パウロ）の言葉によれば、自らを光の天使と装い、⁵⁾ 義に仕える者⁶⁾ を装っているが、昼の代わりに夜を、救いの代わりに滅びを、希望と見せて絶望を、信仰を口実にして背教と不信を、キリストの名のもとに偽キリストを提供するのです。そこで彼らはわらなくみと錯覚をもって真理をまげるために、偽りを真理に見せかけるのです。こういうことは、愛する兄弟たちよ、私たちが真理の源に帰らず、その泉をたずねず、天の師の教えを守らないために起こるのです。

4. 以上のことは誰が考察し吟味しても、長い議論や証明はいりません。この立証は真理を要約するだけで、容易に確信させることができます。主はペトロに言われました。「お前は岩である。この岩の上にわたしの教会を建てる。死の力もこれに対抗できない。わたしはお前に天の国の鍵を授ける。お前が地上で禁止することは、天上でもそのまま認められる。お前が地上で許可することは、天上でもそう認められる」(マタ 16, 18 ; 16, 19.⁷⁾)。主はひとりの人の上に教会を建てられたのです。復活ののちに、主は使徒たちおのおのと同じ権能を与えて言われました。「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもお前たちを遣わす。・・・聖霊を受けなさい。お前

たちがだれかの罪をゆるせば、その罪はゆるされる。お前たちがゆるさねば、ゆるされないまま残る」(ヨネ 20, 21-22)。それにもかかわらず主はその一致をよく示すために、全権をもってこの一致の起源はひとりの人に由来することを定められました。無論他の使徒たちもペトロと全く同じ名誉と権能とを賦与されましたが、その由来は一致から出ているのです。それによって教会が一つであることが証明されるためです。また教会の一致は雅歌の中で聖霊が私たちの主の役割⁹⁾をつとめて言われます。「わがはと、わが全き者はただひとり、彼女は母のひとり子、彼女を産んだ者の最愛の者だ」(雅歌 6, 9)。教会のこの一致を保たない者が自ら信仰を持っていると考えるのでしょうか。(教会の基であるペトロの座を捨てて顧みず)教会に逆らい反抗するものが、教会のうちにあると確信しているのでしょうか。聖なる神秘の一致をさして聖パウロは次の言葉をもって同じことを教えています。「体は一つ、霊は一つです。それは、あなたたちが、一つの希望にあずかるようにと招かれているのと同じです。主は唯一、信仰は一つ、洗礼は一つです。すべての人の父である神は唯一です」(エフェ 4, 4-6)。

5. この一致を私たちはゆるぐことなく確保し、擁護しなければなりません。これはとくに教会の目上である司教が司教職は一つであり分ち得ないことを証明するためです。誰も偽りをもって(教会の)兄弟たちを⁹⁾欺いてはなりません。誰も不信のごまかしによって信仰の真理を偽造してはなりません。司教職は一つであり、各自は全体のためにおのおのの役目を保持しているのです。教会も一つですが、さかんに成長し、さらに数多く広まっています。太陽のように光線は多いが光は一つです。樹木のように枝は多いが一つの強い根の上に幹をすえています。また泉から多くの小川が流れ出て、さまざまなあふれるほどの豊かさを現わしていますが、その一致は源において保たれています。光体から一つの光線を裂いてみなさい。光の一致は分裂を許しません。木の枝を折ってみなさい。ひとたび折られた枝は芽をふかないでしょう。流れを泉から切り離してみなさい。すぐに

干上がるでしょう。このように主の光に照らされている教会もまた、全世界にその光を照らしていますが、それはあまねく降りそそぐ一つの光であって、その体の一致は分かたれてはいません。教会は全世界に枝を豊かに広げ伸ばしています。教会は満々たる流れをそそぎ出しています。それにもかかわらず、その源は一つです。教会は豊かな実りを産み続けるひとりの母です。私たちはその胎から生まれ、その乳で養われ、その精神で生かされているのです。

6. 姦通にいざなわれるようなことはキリストの浄配にはあり得ません。彼女は汚れなく、貞淑です。彼女は一つの家のみを知っており、貞淑な恥らいをもって一つの屋根の清浄を守っています。彼女は神のために私たちを守ります。彼女は産んだ子を神の国に渡します。誰でも教会から離れて姦婦と交わるものは皆、教会の約束から離れていきます。そしてキリストの教会から離れ去る者はキリストの報いを受けることができないのです。彼は他人であり聖徒ではなく¹⁰⁾ 敵なのです。教会を母として持たない者は、神を父として持つことができないのです。ノアの箱船の外にいて免れた者があつたら教会の外にいても免れることができたでしょう。主は警告して言われます。「わたしの味方でない者はわたしに反対しており、わたしといっしょに集めない者は散らしている」(マタ 12, 30)。キリストの平和と和解を破壊する者はキリストに反する者であり、教会以外の場所に集う者はキリストの教会を散らす者である。主は言われます。「わたしと父は一つである」(ヨハ 10, 30)。さらにまた父と子と聖霊についてはこう記されています。「そして、この三者は同じことを証しています」(1ヨハ 5, 9)。このように神の力によって来たり天の神秘に密接な関係のある一致が、教会で分裂できると信じる者があるでしょうか。この一致を保持しない者は神のおきてを保持せず、父と子の信仰を保持しない者は救いと生命とを保持しないのです。

7. この一致の聖なる神秘・和合のきずなこそ次の福音書の意味なのです。つまり、私たちの主イエズス・キリストの衣が全く分けられず裂かれずに誰のものになるかについてくじにされ、完全な衣として受け取られ、無傷の、分かつたれない下着として保持されていたのです。聖書は語っています。「下着には縫い目がなく上から下まで一枚織りであった。そこで『これは裂かないで、だれのものになるか、くじ引きで決めよう。』と話し合った」(ヨハ 19, 23-24)。この衣には一致がありました。上からの、すなわち天から、おん父から下った一致です。それは受ける人からも持つ人からも全く裂かれることはありませんでした。そしていつも完全に同時に固くて分かち得ない確固不動さを持っていました。キリストの教会を分割し引き裂く者はキリストの衣を持つことはできません。これに反してソロモンが死んでその国と民とが分裂された時、預言者アフィヤは野でヤラベアムに会い、自分の衣を12の切れに引き裂いて言いました。「あなたは10切れを取りなさい。イスラエルの神、主はこう言われる。『見よ、わたしは国をソロモンの手から裂き離して、あなたに10部族を与えよう。(ただし彼はわたしのしもべダビデのために、またわたしがイスラエルのすべての部族のうちから選んだ町エルサレムのために、ひとつの部族を持つであろう)』」(1列王 11, 31-32)。イスラエルの民が12の部族に分割されたので預言者アビアは自分の衣を引き裂いたのです。しかしキリストの民は引き裂かれ得ないから、ひとつに織られ縫い目のないキリストの衣も、それを持っている人々も引き裂かれ得ないのです。それは分かつたれずに固く結ばれ繋がれた私たちキリストを着た民の、緊密や和合を示しています。キリストはその衣の神秘的なしるしによって、教会の一致を明らかに示されたのです。

8. したがって、神の一致(主の衣)、キリストの教会を分けることができるかと信じる者あるいは敢えてこれを裂こうと企てる、冒瀆で不誠実、不和の気違い沙汰に狂った者があるでしょうか。主は自ら福音書の中で警告し教えて言われます。「こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れ

になるのである」(ヨハ 10, 16)。だから、一つの場所に多くの羊飼が、あるいは多くの群れがあり得ると誰が信じることができますか。さらに使徒パウロは同じこの一致を勧告し私たちに切願し訓戒して言っています。「兄弟たち、わたしたちの主イエズス・キリストの名によってあなたたちに勧告します。みんなで勝手なことを言わず、仲たがいせず、心と意思を一つにして、一心同体になりなさい」(1コリ 1, 10)。彼はまた言います。「平和のきずなで結ばれて、霊の働きの下に一致を保つように努めなさい」(エフェ 4, 3)。あなたは教会から離れてほかの建物を建てた者が、立って生きることができると思いますか。教会を前表したラハブにはこう言われています。「あなたの父母、兄弟、およびあなたの父の家族をみなあなたの家に集めなさい。ひとりでも家の戸口から外へ出て、血を流されることがあれば、その責めはその人自身に帰すでしょう」(ヨシュ 2, 19)。同様に出エジプト記のおきてにおける過越の祭りの神秘はキリストのかたどりとして殺される子羊が、一軒の家の中で食べられなければならないという内容に他なりません。神は語って言われます。「ひとつの家でこれを食べなければならない。その肉を少しも家の外に持ち出してはならない」(出 12, 46)。キリストの肉、主の聖なるからだ¹¹⁾は外に持ち出されないし、信者にとっては唯一の教会の外に家はないのです。この家、この和合の場を聖霊は次の言葉をもってさし示して言っています。「神はわれらを祝福されました。地のもろもろのはてにことごとく神を恐れさせてください」(詩 67, 7)。人は神の家、キリストの教会にのみ和合をもって住み、ここにのみ調和と純朴をもってとどまることができるのです。

9. それゆえに、聖霊もまたはとの形をもって下って来られました。はとは純朴で快活な生き物です。胆汁のいがさはなく、怒って噛むことのない生き物、荒々しく爪で引き裂かない生き物、人間の家を愛する生き物、一つの家の共同生活を知っている生き物です。またはとは協力してひなをかえし、つねに寄りそって飛び、互いに共存して暮らし、くちばしをすり合

わせて平和の和合を示し、何事においても和合のおきてを守ります。この純朴さは教会においても知られねばなりません。このおきてがここにおいても獲得されねばなりません。つまり教会の兄弟はこのようにはどの愛をまね、柔和と従順において子羊や羊と同じようになるためです。狼¹²⁾の残忍、犬の狂暴、蛇の猛毒、野獣の血なまぐさい残酷さが、キリスト信者にあるとは何事でしょうか。はとが、キリストの羊が残忍・有毒な伝染によって陥らされることのないように、このような者が教会から出て行くのは、私たちの喜び祝うべきことです。にがさと甘み、暗闇と光明、雨降りと晴天、戦争と平和、沃地と荒れ野、泉と干ばつ、静穏と暴風、これらは決して密接に結び合うことはありません。誰も善人が教会から離れ得ると思っはなりません。小麦¹³⁾を風は吹き散らしません。強い根を基とする木を嵐は倒しません。風に吹き散らされるものはもみがらのみです。旋風の一吹で根こそぎになるのは無力な木です。こういう者には使徒ヨハネののろいと戒めがあてはまります。「彼ら（反キリストたち）はわたしたちから去って行きましたが、もともと仲間ではなかったのです。仲間だったのなら、わたしたちのもとにとどまっていたでしょう」（1ヨハ2、19）。

10. こういうわけで異端がたびたび起こり、今も続出しています。ゆがんだ精神は平和を持たず、和合のない不誠実は一致をもっていないからです。しかし主はこうなることも許し、忍んで下さいます。それは私たちが自分の自由意志が独立し束縛を受けずにあり、真理の識別によって心と精神をためし、試みられた者の汚れない信仰が明るい光で輝くためなのです。聖霊は使徒の口をもってあらかじめ警告して言われます。「あなたたちの間で、だれが本物かはっきりするためには、仲間争いがあるのも避けられないかもしれません」（1コリ 11、19）。こうして是認された人は現れ、不誠実な者は仮面を剥がれるのです。こうして審判の日の前に善人と悪人との霊魂は分けられ、穀¹⁴⁾は麦から取り除かれます。神の命令なしに独断で、あちこちからの無分別な者の集まりで、自分を目上におく者、誰からも司

教の地位を与えられないのに自ら司教の名を横領する者、こういう者が前記の者なのです。聖霊は詩編の中でこういう者を次のように表現しています。疫病の座に座る者、信仰のペストに汚れ蛇の口をもって欺く者、真理をまげる教師、有害な舌から死の毒を発する者、と。彼らの言葉はがん¹⁵⁾のように忍び込み、その書き物はすべての人の心にも死の毒を注ぐものです。

11. 主は声をあげて、この種の人々から迷っている民を引きとめ呼び返して言われる。「あなたがたに預言する預言者の言葉を聞いてはならない。彼らはあなたがたに、むなしい望みをいだかせ、主の口から出たのではない、自分の心の黙示を語るのである。彼らは主の言葉を軽ろんじる者に向かって絶えず『あなたがたは平安を得る』と言い、また自分の強情な心にしたがって歩むすべての人に向かって『あなたがたに災いはこない』と言う。預言者たちはわたしが彼らに告げなかったのに、彼らは預言した。もし彼らがわたしの議会に立ったのであれば、わたしの民にわが言葉を告げ示して、その悪い道と悪い行いから、離れさせたであらうに」(エレ 23, 16-17; 21-22)。主は再び、同じことを指し示して言われます。「生ける水の源であるわたしを捨てて、自分で水ためを掘った。それは、こわれた水ためで、水を入れておくことのできないものだ」(エレ 2, 13)。唯一の洗礼のほかに洗礼はないのに、彼らは洗礼を授けることができると妄想するのです。生ける水の源を捨てたのに、命と救いの水の恩恵を約束するのです。そこでは人は清められずに、かえって汚されます。そこではまた罪が購われることなく、かえって罪が重なるのです。このような誕生は神のためではなく、悪魔のために子を産むようなものです。虚偽から生まれ、真理の約束を受けることではないのです。不信から生まれ、信仰の恵みを失うのです。不和の狂乱によって主の平和を破った者は平和の報いを受けることができないのです。

12. また主が「二人または三人がわたしの名によって集まっているとこ

ろには、わたしもその中にいるのである」(マタ 18, 20)と言われたことに関して人は偽りの解釈によって自分を欺かないようにしなければなりません。福音書を曲解する者、偽って解釈する者は終わりの言葉を引用し、初めの言葉を顧みないのです。ある部分を許し、ある部分はこうかつに隠すのです。彼ら自身が教会から離れたように、意味の一致した部分を切り捨てるのです。主は弟子たちに一致と平和を説きすすめられた時にはこう言われました。「はっきり言っておくが、どんな願い事であれ、お前たちのうち二人が地上で心をつにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。ふたりまたは三人がわたしの名によって集まっているところには、わたしもその中にいるのである」(マタ 18, 19-20)。主はこれをもって数のことではなく、願う人の一致が最も大切なことを示されたのです。主の言葉「お前たちのうち二人が地上で心をつにするなら」で、主は平和の一致を先におかれ、私たちが一致すべきことをしっかりと教えこまれたのです。¹⁶⁾しかし教会のその体にさえ一致せず、また全兄弟と一致しない者が、どうして他の人と一致することができるのでしょうか。キリストとその福音から明らかに離れた者が、どうしてキリストの名をもって二人三人と集まることができるのでしょうか。離れたのは私たちではなく、彼らこそ私たちから離れたのです。彼らはのちに異端と分離を生み、さまざまの団体を造り、真理の源、その由来を立ち去ったのです。しかし主ご自身は教会からのみ話し、教会のうちにいる人に向かって話されます。彼らが主ご自身の定められた戒めのように、二・三人が一致した心で祈るのなら、たとえ二・三人だけであっても、神のみいつをもってどんな願い事でもかなえてくださると教えられたのです。「二人または三人がわたしの名によって集まっているところには、わたしもその中にいる」と主は言われます。主は純朴な者、温和な者とともにおられるのです。神を恐れる者、神のおきてを守る者がそうなのです。このように、ただ二・三人だけでも、その中にいると言われた主は、三人の若者¹⁷⁾と共に燃えさかる炉の中におられたのです。彼らは神に対して純朴で互いに一致した心であったから、燃える

火のまっただなかにあっても、主は彼らに快い風を送って生かされたのです。同じように主は牢獄に閉じこめられていた二人の使徒¹⁸⁾に現れたが、それは二人が純朴で一致した心でいたからです。主はご自身で牢獄の鍵をあけ、彼らが説教した言葉を再び群衆に告げるために自由をお与えになりました。それで、主が定められた命令において、「二人または三人がわたしの名によって集まっているところには、わたしもその中にいる」と言われるとき、これによって教会を定め、設立されたとして、人間を教会から分離させるつもりはなかったのです。これに反して主は離教者の不和を非難し、その言葉によって信仰ある人に平安をゆだね、意見の異なる多数と共にあるよりも、一つ心で祈る二・三人と共にあることを喜ばれるのです。そして多数の不一致の祈りよりも、少数の一致した祈りが多くの実りを得られることを示されたのです。

13. こういうわけで、主は祈りのおきてを定めるときにも、またつけ加えて言われました。「また、立って祈るとき、だれかに対して何か恨みに思うことがあれば、ゆるしてあげなさい。そうすれば、お前たちの天の父も、お前たちの過ちをゆるしてくださるのだ」(マコ 11, 25)。主はまた不和でありながら祈りに来た者を祭壇から呼び返し¹⁹⁾ まず自分の兄弟と和睦し、温和な心をもって戻ってきて、それから神に供物を献げるように命じられました。神はカインの供物をも顧みられませんでした。²⁰⁾ つまり、不和とねたみのために兄弟と平和を保ち得なかった彼は、神における平和を保つことも出来なかったのです。従って、自分の兄弟に敵対する者にどんな平和の見込みがあるのでしょうか。司祭をねたむ仇²¹⁾ はどんな供物を献げようと思うのでしょうか。キリストの教会の外で会合している彼らが共に集まったとき、キリストが共におられるとでも空想しているのでしょうか。

14. こういう者はたとえ御名を告白して殺されても、その汚れは血によってさえ洗い清められません。²²⁾ 償い得ない不和の重い科(とが)は苦難

によっては消されないのです。教会の中にいない者は殉教者ではあり得ません。やがて治めるようにと定められたみ国を捨てた者が、そこに入ることにはあり得ません。キリストは私たちに平和を与え、一つの心、一つの精神を持つように命じられました。キリストは愛と慈悲の結びを傷なく汚れなく守るように命じられました。兄弟愛を守り続けなかった者が、自ら殉教者であることを証明することはできません。このことを使徒パウロは教え、証明して言っています。「たとえ、わたしが山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がなければ、わたしはなんの価値もありません。また、自分の全財産を貧しい人々のために使い尽くそうと、自分の体を焼かれるために渡そうと、愛がなければ、わたしにはなんの役にも立ちません。愛は忍耐強く、愛は親切です。ねたみません。愛は自慢せず、また、高ぶりません。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱きません。不正を喜ばないで、真実を喜びます。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐えます。愛はけっしてなくなりません」(1コリ13, 2-5 ; 7-8)。

「愛はけっしてなくなりません。」これが彼の言葉です。愛は永久に天国にあり、兄弟愛の密接な一致によって永遠まで続くのです。不誠実な棄教をもってキリストの愛を汚した者は、キリストの報いを得ることはできません。キリストは言われました。「わたしがお前たちを愛したように、お前たちも愛し合うこと、これがわたしのおきてである」(ヨハ 15, 12)。愛を持たない者は神を持たないのです。使徒ヨハネは言っています。「神は愛です。愛に生きている人は、神の内にもおり、神もその人の内にもおいでになります」(1ヨハ 4, 16)。神の教会において心を一つにした和合を持たなかった者は、神と共に住むことはできません。彼らは、たとえ炎に投げ入れられて焼かれても、猛獣に投げ与えられて命を失っても、それは信仰の冠ではなく、背教の罰にすぎないのです。信仰の徳の誉れある最後ではなく、自暴自棄の滅びにすぎないのです。悪魔もたびたびおのれをキリストと称したように、こういう人たちも同じく、おのれをキリスト信

者だと公言するのです。主は前もってこれを警告して言われました。「わたしの名を名のる者が大勢現れ、『わたしがそれだ』と言って多くの人を惑わすだろう」(マコ 13, 6)。名をもって欺いても彼はキリストではないように、真の信仰を固く保たない者はキリスト信者とみなすことはできないのです。

15. 預言をすること、悪魔を追い払うこと、またこの世で不思議を行うことは、たしかに崇高で称賛すべきことです。しかし、それにもかかわらず、たとえこれらすべてを行っても、正しい道を守らなければ、み国に入ることはできません。主は明らかに告げて言われます。「裁きの日には、大勢の者がわたしに、『主よ、わたしは御名によって悪魔を追い出し、御名によって奇跡をいろいろ行ったではありませんか』と言うにちがいない。そのとき、わたしはきっぱりとこう言おう。『お前たちのことは全然知らない。悪事を働く者は、わたしから離れ去れ』」(マタ 7, 22-23)。人が神を慈悲ある裁き手と知るためには、おきてと戒めに従わねばなりません。主はその福音の中で私たちの希望と信仰の道を教えたとき、こう言われました。「第一のおきては、これである。『イスラエルよ、聞け。我らの神である主は、唯一の主である。心を尽し、魂を尽し、思いを尽し、力を尽して、お前の神である主を愛せよ』。第二のおきては、これである。『隣人を自分のように愛せよ』。この二つに勝るおきてはほかにない」(マコ 12, 29-31)。「律法全体と預言者の教えは、この二つのおきてに基づいている」(マタ 22, 40)。主はその教えで自ら愛と共に一致を教えられました。主は二つのおきてのうちに、すべての預言者と律法全体をまとめられました。だから、不和の狂気沙汰に欺かれて教会を分裂させ、信仰を分裂させ、信仰を破壊し、平和を妨げ、愛を裂き、尊い神秘を汚す者は、どういう一致を保つのでしょうか。どういう愛を守るのでしょうか。

16. 最も信頼する兄弟たちよ。この悪はずっと前に始まったのでした。し

かし今ではこの敵意ある悪弊が強大になっています。そして異端の迷いと分離の有毒な滅びがさらに起こり、はびこり始めました。世の終わり²³⁾にはこうならねばならないのです。聖霊は使徒の口をもって、あらかじめ私たちに警告して言われました。「終わりの時代には困難な時が来ることを悟りなさい。そのとき、人々は自分自身を愛し、金銭を愛し、ほらを吹き、高慢になり、神をあざけり、両親に従わず、恩を知らず不敬けんになります。また、情けを知らず、和解せず、中傷し、節度がなく、残忍になり、善を好まず、人を裏切り、軽率になり、思い上がり、神よりも快樂を愛し、信心を装いながら、その実、心の力を否定するようになります。こういう人々を避けなさい。彼らの中には他人の家に入り込み、愚かな女どもをたぶらかしている者がいるのです。彼女たちは罪に満ち、さまざまの情欲に駆り立てられており、いつも学んでいながら、けっして真理の認識に達することができません。ヤンネスとヤンプレスがモーセに逆らったように、²⁴⁾彼らも真理に逆らっています。彼らは精神の腐った人間で、信仰の失格者です。しかし、これ以上増大しないでしょう。彼らの無知がすべての人々にあらわになるからです。ヤンネスとヤンプレスの場合もそうでした」(2 ティモ 3, 1-9)。預言されたことはすべて成就します。そして世の終わりは近いから人も時も、すでに証明が実現したのです。反対者が狂えば狂うほど、誤謬は欺くのです。愚鈍が頭をもたげ、ねたみが燃えさかり、どん欲が目くらませ、不謹慎がいざない、高慢が高ぶり、不和が爆発し、そして短気が滅びにつき落すのです。

17. しかし、多くの者の非常に思いがけない棄教に動揺したり、うろたえたりしてはなりません。私たちはむしろ前もって預言された真理によって、信仰を強めねばなりません。ある者はこの預言者のように棄教者になり始めたから、他の兄弟たちはこういう者に用心しなければなりません。これもまた、あらかじめ主の教えによって述べられています。「だから、気をつけていなさい。いっさいのことを、お前たちにはこのように前もって言っ

ておく」(マコ 13, 23)。兄弟たちよ、お願いします。ぜひとも、このようなともがらを避けるようにしてください。彼らの有害な談話を死の疫病のように、あなたのそばから、あなたの耳から遠ざせるようにしてください。次のとおり記されているのです。「あなたの耳にいばらの垣をめぐらし、悪い舌に耳をかさないようにしなさい」(集会 28, 28)。「悪いつきあいは、良い習慣を台なしにする」(1 コリ 15, 33)。そのような者から身を引くのが主の教えであり、警告なのです。彼らは盲人の道案内をする盲人だ。盲人が盲人の道案内をすれば、二人とも穴に落ちてしまう」(マタ 15, 14)。そういう者には背をむけるべきであり、また一度教会を離れた者は避けるべきです。「このような人は心がすっかりゆがんでいて、みずから悪いと知りつつ罪を犯しているのです」(ティト 3, 11)。キリストの聖職者と信者から自分を離しているものが、キリストと共にいるとでも空想するのでしょうか。こういう者は教会に向かって武器を取り、神の命に対して戦うものです。祭壇の敵、キリストのいけにえの反逆者、信仰の代わりに不信仰をもってする者、敬畏の代わりに冒瀆をもってする者、不従順なしもべ、親不孝な息子、敵意を抱く兄弟として、司祭を軽蔑し、神の司祭を見捨てるわけです。こうして別の祭壇を築き、許されていない言葉をもって新しい祈りをします。偽りのいけにえをもって主のいけにえを汚すことを、あえて試みるのです。その時神の命令に逆らう者は誰でも、その無謀な大胆不敵さによって天罰を受けることを考えないのです。

18. このようにして、コラとダタンとアビラム²⁵⁾も、モーセとアロンに反抗して、おのれのいけにえを献げる許しを得ようと試みたが、たちまちその冒険の償いしなければならなくなりました。地はその口を開き、深い淵を造り、その地の裂け目は彼らを生きながら飲みこんでしまったのです。神の激怒はただ扇動者を打ったばかりでなく、さらに主のもとから出た火は彼らに加わった 250 人の共犯者をも、見るまに焼き尽してしまいました。これは疑いもなく、これらの悪人が人間の意志をもって神の命をくつがえ

そうしたのは、すべて神への反抗であることを戒め示すためだったのです。ウジア王もまた、このようなことをしました。この王は香炉をたずさえ、神のおきてに逆らって無謀にも自分でいけにえを献げることを激しく要求しました。²⁶⁾ 司祭アザリアは王に屈服しようとしませんでした。そのとき王は天の激怒の罰を受け、その額にライ病が生じました。こうして王は神を侮辱したためにその恵みの印を受ける額²⁷⁾ に罰の絡印を受けたのです。またアロンの息子たちは神の命に反して異火（ことび）を献げました。²⁸⁾ これは主の命じたものではなかったから主の復讐によって、たちまちその前で死にうせてしまいました。

19. その模倣者・後継者である彼らは、神の聖伝を軽んじて²⁹⁾ 新奇な教養を求め、全く人間の発明した宗派を造りだすのです。彼らに対して主は福音で非難し叱責してこう言われます。「あなたたちは神のおきてを捨てて、人間の言い伝えを固く守っている」(マコ 7, 8 ; 13 参照)。この罪は、犯した罪を痛悔し完全な償いをもって、心から神に嘆願する背教者よりも重いのです。背教者の場合には教会を求め嘆願するが、この場合には教会に反抗するのです。前者では恐らく強制があったかもしれないが、後者では自発的に罪にとどまったのでしょう。一方の背教者はおのれの不利益を招くだけであるが、他方、背教と分離を造ろうとした者は他の者をも誤りに惑わしたわけです。前者は一人の靈魂の損失だが、後者は多くの人々の危険となるのです。前者は少くともおのれの犯した罪を認めて嘆き悲しむが、後者はかえって犯した罪を誇り、子供を親から離れさせ、羊を羊飼いの手から誘い出し、神の聖なる神秘³⁰⁾ を破壊しながら、自分の罪を喜んでいるのです。背教者は一度罪を犯しただけだが、後者は毎日罪を重ねていくのです。後になって殉教した背教者は天国の約束を得られるが、後者は教会の外で死を忍んでも、教会の報いを得ることはできません。

20. 愛する兄弟たちよ。証聖者³¹⁾ の中にさえも邪道に陥って、こういう

極悪重大な罪を犯した者が何人あったことを知って、誰も驚いてはなりません。信仰宣言そのものは人間の悪魔のわなから解き放たないのです。まだこの世にいる人々にとって誘惑や危険や世の攻撃に対して、完全な保証を与えないのです。そうでなければ、証聖者の中にこのような、後になって犯した詐欺、淫乱、姦通などの罪を見ることはないはずです。しかし残念ながら、今何人かの証聖者のうちに、それを見出すのです。その証聖者が何者であろうと、ソロモンよりも神に愛されるべき者、彼よりもすぐれた者、善良な者はいないのです。彼でさえ神の道を歩んでいる間だけは神から受けた恩恵を保っていたが、神の道を見捨ててからは、その恩恵をも失ってしまいました。こういうわけで、次のように記されているのです。「お前の栄冠をだれにも奪われぬように、持っているものをしっかりと守りなさい」（黙示 3, 11）。主は正義の冠を取り去ると脅かされたのではなく、正義を離れば、冠もまた離れると明らかに教えられたのです。

21. 信仰宣言は栄光の第一歩です。それだけではまだ栄冠の価値はありません。それはまだ称賛を完成したのではなく、名誉の初まりなのです。「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」（マタ 10, 22）と書き記されています。だから終わり以前のことはすべて救霊の頂きに昇る一段なのです。決してすでに得た頂上の目的地ではありません。今、証聖者であるなら、信仰宣言前よりも一層激しく悪魔の挑発を受けるから、危険はさらに増大するのです。今、証聖者であるなら、福音によって主から名誉を得たので、前より一段と神の福音に味方して立たねばなりません。「すべて多く与えられた者は、多く求められ、多く任された者は、さらに多く要求される」（ルカ 12, 48）のです。誰も証聖者の悪例にならって身を滅ぼしてはなりません。誰も証聖者の悪い行状から不正・冒険・不信仰を学んではなりません。証聖者であるなら、さらに謙遜になりなさい。一層温和になりなさい。キリストの証聖者と名づけられた者なら、その宣言するキリストにならい、へり下って控え目にふるまいなさい。「だれでも高ぶる者は下げられ、へりくだる人

は上げられるのである」(ルカ 18, 14)というキリストの言葉どおりに。神のみ言葉・父である神の能力・英知である彼は自らへり下ってこの世に來られたので、おん父によって上げられたのです。彼は自らのおきてによって謙遜を教え、その報いとして、お父から最高の御名を賜ったのです。この彼がどうしてうぬぼれを愛することができるのでしょうか。キリストの証聖者であるということ——それは後になってもその人によってキリストの威光と尊厳が冒瀆されない場合に限られるのです。キリストを宣言した舌は悪口好きの不届きな舌であってはなりません。こういう舌から侮辱や無礼や争いを聞かせてはなりません。こういう舌に名譽³²⁾の後で兄弟や神の司祭たちに対する蛇の毒を投げつけさせてはなりません。もし後になってその人が非難され嫌われたり、悪い行状によってその(信仰)宣言を無駄にしたり、恥ずべき不名譽によってその生活を汚したり、さらには自分が証聖者であった教会を見捨てて一致によって成り立つ和合を破るなら、そういう者は最初の信仰を後の不信仰とすりかえる者であり、自らおもねって、宣言の栄光の報いに選ばれた者と言うことはできない。むしろこれによって自分の罪の儲けがさらに増えることになるのです。

22. ユダも主によって弟子のうち選ばれましたが、結局主を裏切ることになってしまいました。しかし裏切者のユダが仲間を離れてから、そのために使徒の信仰や堅固さは倒れることはありませんでした。このように、ここでも何人かの信仰が破れても、ただちにそれが証聖者の神聖と名譽の損害にはなりません。使徒パウロはその書簡の中でこう述べています。「もっとも、彼らの中には不誠実な者もいましたが、それがどうしたというのでしょうか。彼らの不誠実のせいで、神も人間に対して不誠実になるとでもいうのですか。けっしてそうではありません。人間はすべて偽り者で、神は真実なかたであるはずです」(ロマ 3, 3-4)。証聖者の大部分しかも最も善良な部分はまだ信仰の力と、神のおきての真理、主の規律に固く立っているのです。神によって教会で恩恵をいただいたことを記憶して

いる者は、教会の平安から出ることはしないのです。かつて共に(信仰)宣言した仲間が信仰を捨てた者から自分を引き離し、それによって罪の汚れを免かれた人は、その信仰に対してさらに高い名誉を獲得するのです。彼は福音のまことの光に照らされ、主の清い輝きに包まれ、これによって悪魔との戦いに勝利を得た者と同じく、キリストの平和を保つに価する者となったのです。

23. 愛する兄弟たちよ。私の望みまた心配と戒めはこれです。出来るだけ一人の兄弟も滅びることなく、また母(なる教会)が一致した民の一つの体を喜んで自分の体内に包むことです。しかし私たちのこの有益な忠告が、自らの盲目や頑固な気遣沙汰にとどまっている分離の指導者や背教の張本人を救いの道に呼び戻すことができなければ、せめてあなたがただけは自分をその偽りのわなから免れるようにしなさい。あなたがたは単純なために、奪い取られ、あやまった考えに誘われ、怪しげでこうかつなたくらみに欺かれるのです。迷いの歩みを邪道から踏みもどし、天国へ導くまことの道を見分けるようにしなさい。使徒パウロの次の言葉はこのことを確証しています。「主イエズス・キリストの名によって命じます。怠惰な生活をして、わたしたちから受けた教えに従わないでいるすべての兄弟を避けなさい」(2テサ3, 6)。また「内容のない教えに惑わされてはなりません。これらの行いのために、神の怒りは不従順な者に下るのです。だから、彼らの仲間に入れられないようにしなさい」(エフェ5, 6)。私たちは墮落している者から離れなければなりません。いやむしろ逃げ去らねばなりません。そうしなければ真理の道から離れ、悪い行状の者の仲間となり、罪と迷いの道を歩みつつ、自分も同じ罪の中に入れられることとなります。神は唯一、キリストはただひとり、教会も信仰とただ一つです。その民は和合のにかわ(接着剤)によって固い単一の体に繋がれた一つの民なのです。この一致は裂かれることなく、一つの体の継目は暴力的な分離によって分けられず、その内臓は引き裂かれたり、切れ切れにされたりす

ることはないのです。胎内から分かれるものは自分のために生きることも、呼吸することもできず、救いの基を失ってしまうのです。

24. 聖霊は私たちに警告してこう言われます。「(さいわいを見ようとして)、いのちを慕い、ながらえることを好む人はだれか。あなたの舌をおさえて悪を言わせず、あなたのくちびるをおさえて偽りを言わずな。悪を離れて善をおこない、やわらぎを求めて、これを努めよ。³³⁾」平和の子は平和を探し求めねばなりません。愛のきずなを知りこれを重んずる者は、不和の悪に舌を慎まなければなりません。受難を目前にして主は聖なるおきてと有益な教えに次の言葉を加えて言われました。「わたしは、平安をお前たちに残し、わたしの平安を与える」(ヨハ 14, 27)。主は平和を私たちに家督として与えられ、平和を守るために、語られたすべての恵みと報いを約束されたのです。もし私たちがキリストの相続人³⁴⁾であるならば、それらしくキリストの平和にとどまりましょう。もし私たちが神の子であるならば、平和を実現する人³⁵⁾でなければなりません。「平和を実現する人は幸いだ。神の子と呼ばれるから」(マタ 5, 9)。神の子は平和を実現する人でなければなりません。心の柔和な者,³⁶⁾ 言葉の正直な者、愛に一致し、和合のきずなをもって互いに忠実に結ばれた者でなければなりません。

25. 前に、使徒たちの間にはこの和合がありました。そのように、信者の新しい民の間にも主のおきてに従いつつ、まことの愛を保ったのでした。これを聖書は確認してこう言っています。「信じた人々の群れは心と意思を一つにしていた。」(使徒 4, 32)。また「彼らは皆、婦人たちやイエズスの母マリア、またイエズスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた」(使徒 1, 14)。こういうわけで、彼らの願いと祈りは有効でした。こういうわけで、願ったことはすべて神のあわれみによって、信頼をもって受けることができたのです。

26. しかし私たちのうちでは施しの精神が退歩したのに比例して、和合も減少しました。かつては動産・不動産を売り、³⁷⁾ 自分のために天に宝を蓄えるため、³⁸⁾ その価を貧者の使用に分けるようにと使徒たちに贈ったのです。³⁹⁾ しかし今ではこれに反して私たちは財産の十分の一⁴⁰⁾ さえも納めていません。そして主が売ることを命じられた⁴¹⁾ にもかかわらず、私たちはさらに物を買って、持ち物をふやしているのです。こうして私たちのうちには信仰の活力がしぼんできましたし、信者の力も衰えてきました。だから、主は今の時代に関して福音書の中でこう言われます。「人の子が来るとき、はたして地上に信仰を見出すだろうか」(ルカ 18, 8)。私たちは彼のあらかじめ語られたことが、今実現しているのを見ています。つまり、神への畏敬について、正義のおきてについて、愛について、慈善について、忠実な信仰を見出すことができないのです。誰も未来の恐れなど考えようとしません。主の日、神の激怒、不信者にくだる重い罰、信仰に不誠実な者に定められた永遠の苦しみを、誰も考慮しないのです。私たちの良心が信じるならば当然恐れるべきものを、少しも信じないから、恐れられないのです。しかし良心が信じるなら、もっと用心するでしょう。そして良心が用心すれば危険から免れられるでしょう。

27. 愛する兄弟たちよ。できるだけ互いに励まし合うようにしましょう。古い怠惰の眠りをふり払って、主の教訓を守り実行するように警戒しましょう。神が私たちにこうありなさいと命じられたとおりのものになりましょう。すなわち、「腰に帯を締め、ともし火をともしいなさい。主人が結婚の披露宴から帰って来て戸をたたくとき、すぐに開けようと待っている人のようにしていなさい。主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる召使いたちは幸い」(ルカ 12, 35-37) なのです。私たちは出発の日がきたとき、準備なしにあわてることのないように、帯を締めていなければなりません。この世の暗黒から永遠の光明の輝きに導くために、善業をもって⁴²⁾ 私たちの光を輝かせましょう。主が(戸を)叩かれる時、私

たちの信仰が目覚めているように、そしてまた夜番の報いを主から受けるように、主の突然の訪れをいつも用心し予期しながら待ちましょう。もしこれらのおきてが守られるならば、そして、もしこれらの警告や命令が守られるならば、私たちは悪魔のごまかしによって、眠っている間に不意打ちをかけられることなく、かえってキリストの国で夜警のしもべとして、キリストと共に支配するようになるでしょう。(完)⁴³⁾

II Editions :

W.HARTEL, CSEL 3, I (1868)207-233.

E.H.BLAKENEY, *Cyprianus, De unitate ecclesiae*. Text and translation. London, 1929.

P.DE LABRIOLLE, *Cyprien, De L'unité de l'Église catholique*. Trad. et notes. Paris, 1942.

J.N.BAKHUIZEN VAN DEN BRINK, *Scriptores christiani primaevi* I, The Hague, 1946.

III Translations :

English : C.THORNTON, *Library of Fathers* 3(1839)131-152; R.E. WALLIS, ANL 8; ANF 5, 421-429; E.H.BLAKENEY, *loc. cit.*

German : J.BAER. BKV 34(1918); B.STEIDLE, *Des Bischofs Cyprian Hirtenschreiben*, Freiburg, 1939.

French : P.DE LABRIOLLE, *loc. cit.*

Italian : J.GIORDAN, *S.Cipriano, l'unità della chiesa cattolica*. Introd. e trad. Rome, 1930; S.COLOMBO, *Corona Patrum Sales*. Ser. Lat. 2, Turin, 1935

注

- 1) 1ペト5, 8参照。
- 2) ラテン語の動詞 *serpo* 「はう」が, 名詞 *serpens* 「へび」にかかる。
- 3) マタ7, 25参照。
- 4) [愛する兄弟たちよ。] 出典によってはこの句はのっていない。
- 5) 1コリ11, 14参照。
- 6) 同11, 15参照。
- 7) 主は復活ののち, ふたたびペトロに「わたしの子羊を飼いなさい」と言われた。
- 8) 原文 *expersona* は役者・代役の意でここでは聖霊が主の代わり。
- 9) 原文 *fratris* はただ一般に兄弟の意味ではなく, キブリアヌスは教会の兄弟の意味に使う。
- 10) 原文 *profane*
- 11) 原文 *sanctum*, ドイツ語訳では「聖なるからだ」と訳す。
- 12) この言葉でフェリチニズムをはじめノヴァトゥス, ノヴァチアヌスの離教者をさす。
書簡43, 12参照。
- 13) マタ3, 12参照。
- 14) マタ3, 12参照。
- 15) 2ティモ2, 17参照。
- 16) 他の訳: 確固と誠実に一致すべきことを教えられた。
- 17) ダニ3, 17参照。
- 18) 使徒5, 17-26参照。
- 19) マタ5, 23-24参照。
- 20) 創4, 5参照。
- 21) 異端者ノヴァトゥスらをさす。
- 22) これと同じことを書簡55, 17; 25でも述べている。
- 23) キブリアヌスはたびたび世の終わりについて言及する。「無常について」25, 「デメトリアヌス」3-4等参照。
- 24) 出7, 11-22参照。
- 25) 民数16, 31-32参照。
- 26) 2歴代26, 17以下参照。
- 27) キブリアヌスはここで司祭・預言者・王の塗油を連想する。
- 28) レビ10, 1以下参照。
- 29) キブリアヌスが聖伝というとき, キリストの言葉だけでなく聖書全体をさす。聖書

に記されてあることで神の御旨に反しないことはすべて生活上の強制的な義務であると認めている。

- 30) 神からの教会の一致をさす。
 - 31) 迫害の時信仰を公けに宣言したが殉教の死を受けなかった者をさす。
 - 32) 信仰宣言をさす。
 - 33) 詩 33, 13-15 参照。(日本聖書協会訳では詩 34, 12-14)。
 - 34) ロマ 8, 17 参照。
 - 35) マタ 5, 9 参照。
 - 36) マタ 5, 5 参照。
 - 37) 使徒 2, 25 参照。
 - 38) マタ 6, 20 参照。
 - 49) 使徒 4, 34 参照。
 - 40) ルカ 18, 12 参照。
 - 41) ルカ 12, 33 参照。
 - 42) マタ 5, 16 参照。
 - 43) この論文は 251 年 4 月カルタゴ(アフリカ)の司教会議で著者自身によって朗読発表されたもので、彼の他の著作や行動を理解するうえで、きわめて重要な役割を果たすものである。彼はここで教会の一致と和合の根拠を、主キリストが一人の弟子、すなわちペトロの上に教会を建てたという点に求め、異端と分裂の根を断ち切ろうと努めている。
- 彼はペトロを単なる一致のシンボルとしてだけではなく、ペトロの上に築かれた教会の一致の真の理由とみなし、カトリック教会内において各司教区が司教を中心に一つに結ばれることを強調しているのである。

On the Unity of the Catholic Church (1)

A Translation with Notes of St. Cyprian's *De Ecclesiae Catholicae Unitate*.

Kiyoshi YOSHIDA

This treatise was read by its author, Saint Cyprian, the bishop and martyr of Carthage in Africa, to the Bishop council which met at Carthage in April, A.D. 251, that he might get the support of the bishops against the schism started by Felicissimus and Novatus, who had a large following.

This most important work is the key to understand the entire writings, of St. Cyprian. For this theory is everywhere the underlying principle of his conduct and of his writings. What St. Cyprian really says is simply this, that Christ, using the metaphor of an edifice, founds His Church on a single foundation which shall manifest and ensure its unity. And as Peter is the foundation, binding the whole Church together, so in each diocese is the bishop. With this one argument St. Cyprian claims to cut at the root of all heresies and schisms.

The unity with which St. Cyprian deals is not so much the unity of the whole church, the necessity of which he rather postulates, as the unity to be kept in each diocese by union with the bishop. The unity of the whole Catholic Church is maintained by the close union of the bishops who are *glued to one another* (cf. n. 23); therefore, whoever is not with his bishop is cut off from the unity of the Church and cannot be united to Christ. The type of the bishop is St. Peter, the first bishop.

In this treatise, we must keep in mind that its primary aim was not to defend the oneness of all the various churches, but of each within itself. Nevertheless, St. Cyprian sees Peter as not only the symbol, but also as the real reason of unity, which is founded on him (cf. n. 4).